
赤に塗れた君の姿

赤眼鏡の白チヨーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤に塗れた君の姿

【Nコード】

N9762X

【作者名】

赤眼鏡の白チヨーク

【あらすじ】

たまに、寂しそうに遠くを見る貴方が好きでした――
こんな出来事があってもこの世界は何事もなかったかのように廻り続けました。反政府軍の少女、リフィとある青年のさよならの話。
続編未定。 完結作品ですが、番外編のような続編を更新しようと思っております

粉煙が舞う世界の中を、少女が駆け抜けていた。

爆破などで崩壊した建物と形を変えた瓦礫をすり抜け、少女はひたすら走った。

まだあどけなさを残した16歳の女の子の顔には笑顔はない。肩からはライフル、手には拳銃を構える姿は、まるで軍人のものである。
『リファイ！あとどれくらいだ！』

「もう、少し……！」

息をつく隙もなく長時間走りつづけた足は、最早震えるほどだった。立ち止まることはない。

肩に付けた通信機からは次々と仲間の現状が聞こえて来るが、耳を傾けはしない。

「あのプログラムさえ破壊できれば……」

機械に頼りすぎ、世界中の価値を勝手に決めるプログラムなしで生活することも許されない社会で、彼女たちは反逆者と名付けられた。よもや政治を動かすのも株価を変えるのも、ゼウスというプログラムなのだ。

「自由は、自分達の手で手に取る！」

リファイの姿を見つけた仲間達が政府軍と交戦しながら、壁に爆破物を仕掛けた。

「リファイ、行け！俺達もすぐ追いつく！」

「気をつけて、アデア！」

爆破した瞬間髪を容れず建物内に入り込んだ。地図は頭の中に叩き込んである。

「……っ」

人の走り来る足音に気づき息を殺して壁に姿を消す。

数人の過ぎ去る姿と新たに響きはじめた銃声に注意しながら、さらに奥へ、奥へと進んだ。

入り組んだ迷路のような道を進めば、そこには高く、天井まである扉。

「見つけた」

横にあるキーブロックに、ハッキングした番号を打ち込み深呼吸した。

おそらく白い肌だっただろう顔についた煤けた汚れと血を手ぬぐいで拭き取り、番号を認識した扉が開けばそこは。

そこは白い世界だった。

白い壁、白い絨毯、白い天井。

吹き抜けのような広さに左右についている二階からどうやって入っているのか、太陽の光が白さを更に強めていた。

「……どうして太陽が」

この世界は荒れくう戦争の中で公害を引き起こし、異常な二酸化炭素により太陽の見える日時が限定されていた。

今日は太陽の見える日ではない。

口元を引き締め足を踏み入れれば想像していたプログラムの姿はなく、代わりに自分より少し年下のような少女が眠っているように部屋の奥に一人座っている。

その座っている台座のようなものと手足に繋がれているコードの意味に、手先が震えた。

「リフィ」

蒼白の顔色になった少女が声に振り返れば、一人の青年が立っていた。

彼はリフィと同じ反逆者の反政府軍、カカトだった。

「カ、カト」

声が掠れたようにしか出ない。

カカトは無表情にリフィを見ていた。

「これは、これが…政府が縋る神様の姿、なの？」

「そうだよ」

カカトの返答に強く握っていた手から血が出た。

「どんなコンピュータでも暗算にミスが起こるからね。人の脳を通じて世界のあらゆることを暗算させているのさ」

「…酷い」

ゆっくりとリフィの側まで歩いてくると血まみれの手をそっと摩った。

「リフィ、あの子を殺せるかい…？」

リフィは俯き、首を横に降った。

「そう…」

ふ、とリフィは自軍の指揮官であるカカトが何故ここにいるのか疑問に思い、顔を上げた瞬間。

肉を裂く音と共に、痛みが体を巡った。

驚愕の眼差しでカカトを見れば、いつもの見慣れた無表情でリフィを見返していた。

摩っていた逆の手に握られた刃物は、彼女のお腹を刺している。

「カカ、ト…」

「あれは、僕の妹なんだ」

言われた言葉に、頭が回らない。

口から吐き出した血が光る刃物を持つカカトの手を汚した。

「ごめんね」

そう謝罪しながら手に力を入れ傷口を上下に広げていく。

腹部の血は止まることなく彼女の足を汚した。

「…裏切っていたの」

息が抜けるような、ひゅー、という音と共に吐き出した言葉は、あまりにも小さかったがカカトは無表情のまま、また小さくごめんと

眩いた。

ああ、と気づいた。

ここに着くまでの伏兵と追っ手の少なさは、この為なのだと。

「…リフィ」

何故だろう、彼が発した言葉はあまりにも淋しそうである。

足元に水溜まりをつくるほどの吐血をしていたリフィは掠れはじめた意識でそんなことを思った。

「言う資格などないのかもしれないが…君達は僕には眩しかった。羨ましかった…まるで家族のように笑っていられるのが」

ぐちぐち、と音をたててまた傷口が広げられていく。

「…僕の家族を、妹を守るにはこうするしかなかったんだ」

リフィの腕を掴んだ力カトは彼女が手に掴んでいた拳銃を自分の胸元に当てた。

「撃ちたいなら、撃つていい。君にはその資格がある」

暫く驚いたように見ていたリフィだったが、何も言わなかった。

そして、何十秒、何十分たったかもわからない空白の時間が過ぎ去った。

力カトが拳銃からそつと手を離すと、リフィの手から拳銃がこぼれ落ちた。

少女が持つには強すぎる武器が、床に小さな影を作っている。

リフィは、笑っていた。

「…好きな、奴を撃、てる、ほど…非情、じゃ……ないよ」

ついに立っているのも限界になり、ゆっくりと体が倒れるのを力カトが支えながら、静かに床に伏せさせた。

もう、呼吸さえもまともに出来ない状態である。

「リフィ、最後に聞いてくれるかい」

リフィの汗にまみれた髪をそつと撫でるように触れて彼は言った。

「僕も、君が好きだった」

狭まりはじめた視界で見れば、静かに片目から涙を零している力カトの顔が見えた。

「…もしも、生まれ変われたら。その時は一緒に、側にいよう」
口元を動かしたリフィは自分の口が動いたかさえわからなかった。
ただ、笑っていいばいと思う。何を男の癖に夢のようなことを言っているのだ、と。

彼女は、目を閉じた。

彼はそっと彼女に口づけた。

「…おやすみ、リフィ」

動かなくなった体から手を離し、力カトはまるで神に祈るかのよう
に天井を仰ぎ見た。

…いや、彼は祈ったのかもしれない。

対立して生まれてきてしまった少女に、今度はこんな悲しい運命に
会わないように、と。

「君のことは、忘れないよ」

数人の慌ただしい足音を聞き、彼は静かに立ち上がった。

リフィの拳銃を手に持ち、新たな戦いにまた身を投げる為に。

小さな少女は白い世界で眠りつづけた。

彼女と世界に今後何が起るのか、それはまた別の話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9762x/>

赤に塗れた君の姿

2011年11月11日11時59分発行